鹿沼詩友会誌３月号　寸評と資料　　２００５．４．１０　小林　守

１　十六夜の月　小太刀美恵子

古典文学に根ざしている題名なので難しいと思います。使うなら位負けしないようにしたいものです。「淋しがりや，人恋しい、切ない気持ち」などの表現はそのものずばりです。別の文言に変えて表現するよう工夫するといいと思います。

参考　源氏物語(末摘花)

もろともに大内山は出でつれど　入る方見せぬ　十六夜の月

＊＊＊　十六夜の月煌煌と松の影　おなじ思ひの　きみあらめやも

２　しあわせの種　　黒川フミ

「手なごをして作物を全うさせることが　私の命を全うすることに重なります」

この姿勢の強い表出が作者のポエジーのありかです。４月４日下野の投稿詩の掲載よかったですね。あえて言えばもっと文言を削りこんでみてください。

３　老いた母　　岡嶋保之

これまでの読ませていただいた２～３の作品の中で、これは詩的結晶力のあるものだと思いました。「老いた母がぼくの心に、淋しく光り輝くようになった」ことをもっと掘り下げて表現してみればもっといい詩になると思います。

休耕田にうっすらと霜が降りていた日
山深い温泉の村から米寿の母が下りてきた
―お世話になります
不自由な足元を気にしながら車から降りて
差し出したぼくの手に温い手を重ねた
―よく来られたね
初冬の光がひときわまぶしい
精一杯ぼくは笑顔を母に返した

―やまぼうしの紅葉がきれいだね
　山茶花も美しい
花の好きな母が庭をじっと見ながら言った
顔の皺が裸木の年輪のような笑みを浮かべると
こんどはシラシラと私の庭に痛みが降りてきた

山里では真っ赤な紅葉が終わり

木枯らしが吹くまで
黄金の銀杏の葉があざやかだろう　(編詩　小林)

4　意　識　　武田裕也

自意識の網の中で、血も膿も出ていない傷に包帯を巻いて壁をつくる。動けない自分にいらだちながら、それでも後悔が先立ってしまう癖がついた自意識。バーチャルな部屋に蹲る「ぼく」の青春が割れる日はいつ来るのか。
存在に耳を傾け、気合で行動することからはじめよう。恥多き青春の自己認識は、誰にでも後から遅れてやってくるものでしょう。（この詩の思想について、余計なお世話ですが一言）
詩として形象化するのが難しいテーマですね。前回２月号の「雪が積もった」―ガラスの君―の書き方のほうが詩になりやすいのではと思います。

5　父ちゃん　息子が　　伊藤賢治

これまでの作品に比べて、まとまりのいいものになったと思います。それでも全体では冗長ではないでしょうか。最後の２～３連に求道者的な問題意識の深さが感じられます。
「ひたすら　年とろうと目指したものは　こんなにもまばゆいのだから」
「まるで一度も生まれたことがないかのようにやって来てくれては去っていく息子」
「生まれないほうがよかった人々が　地球の角（隅）へと遠のいていく御世に」
これらの言葉には人間存在の深みが覗いて見えてくるようです。ここを軸にして、ここから書き出したら、すごい認識の詩に到るのではと予感します。でも「生まれないほうがよかった人々」については、これがどういう人で、そう判断できるのは誰なのか思想的には疑問です。

6　①　スポーツに目覚めた農婦たち　　宮坂芦畔
　　②　シモツカレー

２編の出品ありがとうございました。　①②とも解説に力点が置かれていますが、①では一人の農婦に絞って、物語風にして書いていくといいなと思いました。一度散文に徹して随想風に書いてみてはいかがでしょうか。そのほうが説得力と味が出てくるのではと思います。②では「シモツカレ」の食文化について、多角的に考察したものを書いてみてはいかがでしょうか。前回の「コンニャク」も医食同源の食文化だと思いますので。シモツカレの語源については、いろいろあるようですが、
広辞苑では「酢憤」すむつかり、すみつかり、しみつかれのようです。

＊＊＊　資料　　吉野弘　詩の森文庫「詩のすすめ」より